

天声人語

自伝といえば、渾身の1冊を晩年に出すのが常識的な線だろう。童話作家アンデルセンは違った。20代で取りかかり、40代早々で刊行した。「私の生涯の物語が私のすべての作品の最上の注釈となるだろう」。みなぎる自己顕示欲に驚く▼不遇な少年時代を送ったせいだろうか。靴職人の父を11歳で失い、13歳の夏には母が再婚して半ば放り出された。身のこなしが鈍く劇団や舞踏団を追われ、自慢の歌唱も声変わりで行き詰まつた▼学生時代をふりかえって、「教室で自分を笑いものにした」と校長を恨む。作家となつてからは「日陰者扱い」「親切な言葉も友情の一しづくも注がれない」と批評家をののしる。ほめられると有頂天になり、けなされると絶望のふちに沈む人だったらしい▼デンマークのフュン島にあるその生家をきのう、皇太子さまが訪れた。小さいころから彼の名作の数々に親しんだと聞く。博物館内に再現された書斎に入り、いすに腰をおろした▼失恋を重ね、働き口にも窮したアンドルセンだが、30代で人生が上向く。小説『即興詩人』が評判を呼び、国王から「詩人としての俸給」が支給される。文名が高まつた後は充足の日々を送り、「自分は幸運の寵兒である」と書く。70歳の夏、国葬で送られた▼人魚姫の実らぬ恋。マッチ売りの少女の死。はだかの王様の愚かさ――。模範的とは言いがたい言動も多々あったようだが、残された物語は人生的諸相を曇りなく描き、世界の子どもの胸の奥にいまも響く。

2017・6・20